

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

『僕へのキャッチコピー』

茨城県

つくばインターナショナルスクール

七年 長谷部 明蓮

僕へのキャッチコピー

つくばインターナショナルスクール 七年
長谷部 明蓮（はせべ あれん）

「ハーフ」僕はこの言葉が嫌いだ。

僕は日本で産まれてシンガポールで過ごした後、帰国した。海外で生活していた時には、父が外国人で母は日本人だけれど、シンガポールでは、なぜなのか僕は日本人として周りから認識されていた。恐らく日本から来て、日本語を話すことができたからだと思う。基本的にシンガポールは多民族国家なので、どんな顔をしていても、肌の色が違っててもみんなシンガポール人なのだ。僕と同じ海外からシンガポールに来ていたクラスメート達も両親のルーツが違う友達ばかりだったし、二か国、三か国もの語学を自由に操れる人も沢山いた。ただ日本から来た人というだけで、何人なのかなんて大して誰も気に留めていなかったし、そんな環境が、とても心地よかった。

日本に帰国して、夏休みを利用して日本の学校に足を踏み入れたときに知りもしない人から見慣れない外国人がきた。と言われたことがあった。そんなことを言われたことがなかった僕は驚いて、「日本語ちゃんとわかっていますよ。」と告げると相手は顔を真っ赤にして逃げ去った。

そのとき瞬時に、僕はこの日本という国では外国人として見られてしまうのだなと思わされた。そんな出来事があった後、僕は懸命に国語や漢字の勉強をした。本も沢山読んで学んだ。すると今度は、あの子はハーフだから日本語が上手で当たり前。と言われるようになった。その言葉を聞いたとき愕然とした。僕の苦勞は、あたりまえという一言で片づけられてしまったように感じた。無論、逆も然りで、英語が話せることも父が外国人で「ハーフ」だから喋れて当然だと思われてしまう。二か国語の読み書きをキープするのは、とても大変なことであることも「ハーフ」というキャッチコピーにかき消されてしまったのだ。

キャッチコピーは、そのものを一言で表し人々に興味や関心を持たせる力のある言葉だと思う。しかし、その裏側では沢山の物事や考え方、苦勞や新たな可能性が秘めているものではないかと僕は思っている。例えば、「日本人」というシンガポールにいた時の僕のキャッチコピーは、日本から来たのかという情報と共に、周りに僕が日本人だと思われる要素が含まれていたからだとも思っている。海外からの日本人のイメージは、まじめとか算数が得意とか綺麗好きとか、ポジティブなイメージで捉えられていた。しかし、一方でこの「ハーフ」というキャッチコピーは、なんだか情報のない薄っぺらなものにしか僕には感じられないのはなぜだろう。

一体どんなことを遂げたら僕は「ハーフ」というキャッチコピーから逃れられるのだろうかと考えていたときに、僕はオリンピックを見ていた。僕と同じ「ハーフ」と思われる選手が色んな競技に日本代表として出場していた。どの選手にも「ハーフ」というキャッチコピーはつけられてはいなかったのだ。

身体能力がずば抜けてすばらしい選手もいれば優雅な選手もいたりして、それぞれのフィールドで持ち味を生かして活躍しているのを見てみると僕は、勇気が湧いてきた。もつともつと頑張れるぞと感じた。僕はきつと「ハーフ」という言葉が僕についてなにも分かっていない情報で作られたキャッチコピーで少ない情報で、その限定的な情報の意味の範囲で

しか物事を達成できない人とか思われぬことに悔しさがあつたのだ。つまりは、「日本人」と「ハーフ」のキャッチコピーの違いは、「日本人」がナショナルリティーを表す言葉であるのと違って「ハーフ」という言葉が区別をし、半分という意味であるのと同じく限定的なイメージを与えているからなのかもしれない。ちなみにシンガポールでは、父方のルーツと母方のルーツの「ミックスマス」と言うことがあるが、両方のルーツを兼ね備えるという意味で多文化に対応できるというポジティブな意味で使われていた。

僕のキャッチコピーが「ハーフ」ではなくなることがあるのかなと考えた時に、僕は、僕であるために出来ることを精一杯して、世界と日本そして自分を繋げられるような人間になれたのならば、その時にはきっと僕に新たなキャッチコピーが生まれるのかもしれないと思うと少しワクワクする。そんな力を兼ね備えた自分に出会えたら、「ハーフ」という言葉は僕を強いものにしてくれるだろう。もしかしたら、その時にも「ハーフ」というキャッチコピーが僕についてきたとしても、きっとうまく飲み込んでしまえるに違いない。